

北海道師範塾
「教師の道」

塾頭通信

第695号 平成26年2月27日

その行為、許し難し！

東京都内の複数の図書館で、「アンネの日記」やそれに関連する書籍が300冊近く、何者かによって破損されたという事件は極めて遺憾です。

遺憾という言葉ではなかなか真意が伝わらない事は、分かっています。しかし、他に適当な言葉が見つかりません。激しい怒りだけではなくて、情けなさや悔しさが、そして恥かしさの入り混じった、何とも名状し難い気分というのが一番正確かも知れません。

まだ犯人像は浮かんで来ませんが、多分、日本人の誰かがその手で犯行に及んだものだろう事は、想像に難くありません。

日本人で「アンネの日記」を知らない人は殆どいないと思いますし、日本人とユダヤ人が敵対関係にあった事もなかった筈です。

米国のユダヤ人人権団体「サイモン・ウィゼンタール・センター」のクーパー副代表も「多くの日本人がいかにアンネ・フランクを学び、敬意を表して来たか知っている（2月21日付朝日新聞他）」と述べていますが、それだけに、今回の事件は衝撃的であると同時に、「アンネの日記」が攻撃のターゲットになった事に強い政治的な意味を感じているのは、私だけではないと思います。

東日本大震災で、被災者の方々のあの厳しい環境の中での抑制のきいた行動によって、日本人は素晴らしいと世界の人々から称賛されたのはつい3年前の事です。それが、今回の「アンネの日記」の破損というニュースが世界を駆け廻る事により、日本や日本人に対するイメージが一新する危険性も有ります。

先程のクーパー副所長も「ホロコーストの犠牲となったユダヤの子どもの記憶を中傷する組織的活動の散財を強く示唆している（2月21日付朝日新聞）」と批判していますが、先般、安倍首相が靖国を参拝した事に対して、一部の国からヒットラーを慰霊するのと同じといった批判の声が上がった様に、今回の事件もそうした事と結びつけ、ある種の悪意や意図を持って日本や日本人に対する批判、例えば「イエロー・ネオナチ」といったネガティブなイメージが作られていく可能性もないとはいえません。

最近、周りはどうあれ自分のやりたい事はやり、いいたい事はいって憚らないという、誠に内向きの空気が蔓延っている事を懸念していますが、今回の事件も、そ

うした空気の延長線上に有る様な気がしてなりません。犯人は自分のやりたい事をやって密かに悦にいつているのかも知れませんが、「アンネの日記」を破損するというのはまさに近視眼的な発想であり、しかも、陰に隠れた振る舞いは極めて卑怯です。

今回の「アンネの日記」の破損事件は、単に図書館の本が毀損されたという事とは次元の異なるものだと認識して置く必要があるでしょう。

警察当局には、様々な雑音を封じる為にも、徹底的な捜査によって速やかに犯人を逮捕していただくことを期待しています。

同時に、政府は、日本が平和国家として世界に貢献しようとしている事を、これまで以上に言葉でも態度でもしっかりと示し、伝える努力をしていただきたいと思っています。（塾頭：吉田 洋一）